

## 第6室(書跡)

# 「一法隆寺伝来の法華経一」

### N-12 法華経(ほけきょう)

黄麻紙に薄墨の界線をほどこした料紙に、『法華経』8巻を通例の一行17文字詰めに書写しています。やや肉太で、力強い筆運びで書写され、全巻一筆です。奈良時代の整然として端正な写経に比べるとやや柔らかみを帯びており、書写の時期が平安時代にかかっている可能性があります。

## 第6室 染織—奈良時代の幡—

幡（ばん）とはお堂の荘厳や、死者への供養に用いる旗のことです。法隆寺宝物館には法隆寺に伝来した飛鳥時代（7世紀）から奈良時代（8世紀）までの幡が多く所蔵されています。また聖武天皇一周忌齋会（聖武天皇が崩御されて一周年の法要：757年）の場で使用し、正倉院に伝来した幡もあわせて所蔵しております。

今回はこうした作品の中から、奈良時代の幡を中心として華やかな幡の数々を展示します。

### N-319-3 平絹襷継分幡（へいけん たすきつぎわけ ばん）

この幡は、細い二条の縁に囲まれた坪は正方形で、各坪とも三角形の色替わりの平絹を4枚縫い合わせており、下方に帯状の幡足を下げています。正倉院にも同じような形をした錦の幡がありますが、この幡は貴重な錦が用いられていないことから、法隆寺幡から正倉院幡へ移行する過渡期の幡と考えられます。

### N-319-22 綾襷継分袷幡残欠（あや たすきつぎわけ あわせ ばん ざんけつ）

N-319-3の幡と同じく、二条の縁で囲まれた坪は正方形で、各坪に三角形の色替わりの綾を表と裏に4枚ずつ縫い合わせています。これらの綾は、古い技法の平地綾文綾で織られた小菱文や九つ菱文などの幾何学文様が中心ですが、縁の綾には、技術的に進んだ綾地綾文綾で、動物に乗る仙人のような文様が表されており注目されます。

### N-319-23 平絹襷継分袷幡残欠（へいけん たすきつぎわけ あわせ ばん ざんけつ）

N-319-3の平絹襷継分幡と同じく色替わりの平絹で仕立てられた幡ですが、幅は倍近くあります。

### N-319-2 錦斜継分袷幡残欠（にしき ななめつぎわけ あわせ ばん ざんけつ）

三角形に裁断した二種類の錦を斜めに縫い合わせ、幡身の各坪を正方形にしています。飛鳥時代の幡では坪が縦長の長方形でしたが、奈良時代になると中国・唐時代の流行にあわせ、正方形の坪が登場します。この幡は聖武天皇の一周忌齋会で使われた錦の道場幡で、植物や動物を細やかに織り出した錦を用いています。

### N-319-4 羅花形縫綴幡（ら はながた めいつづり ばん）

羅という透けた織物に波打つ輪郭をもったダイヤ形の区画を設けた幡。区画の中には金糸で花形が作られ、いかにも装飾的で華やかな仕立てとなっています。この幡もまた聖武天皇の一周忌齋会で使われたものです。